慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	獨逸史學史(坂口昂著, 岩波書店刊行)
Sub Title	
Author	山下, 昌孝(Yamashita, Masataka)
Publisher	三田史学会
Publication year	1933
Jtitle	史学 Vol.11, No.4 (1933. 2) ,p.178(684)- 180(686)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19330200-0178

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

寧ろこれと反對の事實を物語つてゐる樣にさへ思はれるのである。ab universis vicis の句を「全體としての鄕によつて〔鄕全體の共有財產として〕」と譯されてゐるが、未だ農業經濟を殆んど知らないゲルマニヤに於て土地が一つの財產と見られたか何うかは誠に疑はしいのである。彼等の多くは貨幣を知らず、物々交換を主とし、未だ遊牧生活の面影を脫し得ぬもの達であり、彼等の間で問題となつたものはその年齡の多少、身分の高下、戰功の大小、辯舌の巧拙であり、富と云ふものは是等掠奪を事とする人々の間では未だ問題とならぬことであつた。彼等はその住居を定めた以上、たとへ一年限りにせよ勿論その地上權を主張したことであらうし、また女達によつて多少の農作物は作られたであらうが、それは決して農業と云ひ得るほど大したものでは無かつたと思はれる。ab universis vicis（vicus 全體によつて）占有すると云ふことは共有財產として所有すると云ふ意味にまでなるのであらうか。よく土地を棄てて他に移住しがちだつたゲルマニヤ人の團體が或る土地に止まる毎にその土地を共有財產なりと思惟してゐたものであらうか。一步を讓つてたとへそうであつたとしても、この場合の土地共有制と云ふことは土地共產制と云ふことにはならぬのである。彼等は相互にそれぞれの地位によつてその土地を分配し、それを耕したのであり、その產物は當然その開墾者の所有に歸したものであり、ただ自發的にそれぞれの家畜或は農產物を Princeps にもたらす習慣があつたのみである。これは尊敬の徵であると同時に必要に對する保障でもあつた。ただそれだけの事であつた。これが果して共產制であらうか。

また譯者は何うしたものか、この場合 Vicus を Pagus と同樣の「鄕」と云ふ字に譯されてゐるが、軍事的に「百」の精英を有ち政治的に一つの重要な單位であつた Pagus が若し全體として土地共有制を布いてゐたとすれば、これは政治制度としても一つの充實を物語るものとなり、又一つの重要な問題を起すに足るものとなる。Vicus と Pagus とは果して同じものなのであらうか、それも問題である。

斯うした種々な疑問は原譯文に加へられた解釋に就て起されるものであり、古典研究家が誰しも遭遇すべき難關である。たゞしそは如何あらうとも譯書の價値をいささかも左右するものでは無いのである。

前述の如くその譯文は正鵠を得て而も極めて流暢、實に美事なものと言はざるを得ない。評者は第五節と第十三節とにやや希望の箇所をのこしただけで、他は誠に氣持よく幾度か讀み返した。

それからまた譯者がこの書に於て採用された洋音の假名遣は極めて大膽な飽くまで合理的な試として一驚に値する。（近山金次）

獨逸史學史（坂口昂著　岩波書店刊行）

故坂口博士の遺稿上梓の事業は、先般刊行された本書を最後として完成せられたのである。本書は大正十三年から昭和二年に至る連續四年に亙つて京都帝國大學に於て行はれた博士の講義の手記を基礎とし、これに聽講者のノートを對照補訂して成れるもので、年度に從つて四篇に分たれる。

第一篇は啓蒙主義による近代的思想の生成と、ドイツに於ける歴史理論形成時代。歴史が哲學者に隷屬した時代を云ひ、ヘルデルを主とし、カント、フィヒテ、ヘーゲルの歴史思想を說く。卽ち歴史哲學の發生時代である。

第二篇はニーブール以前の史學及びその傳記、著書、並にそれに對する評論。ランケの幼時より一八三〇年代に至る迄の傳記、著書に就いて述べてある。

第三篇はランケの老熟期とドロイゼンの生涯、事業、及びその歴史思想を述べ、併せてランケの史觀を概說し、ジィベルに及び、

第四篇はトライチケの生涯、著書及びモムゼンの生涯とその事業を說いてある。

而してこれ等の骨子となるべき部分は、既に大正三年から同十五年に亙つて諸雜誌に發表せられた博士の史學史に關する諸論文(既刊『世界史論講』中の近世史學の成立中に收む)に胚胎し、更に全篇のプランは大正三年發表の『古代史研究の發展につきて』に要約せられ、その史學史に對する態度を明にせられて居り、既に當時より本講義に至る迄絶えず研究を積まれ遂にこの成果を得られたのであつて、かく廣汎に亙つて該博な知識が示されてゐるのも決して偶然ではない。さて本書を通讀してみると、その著しく個人中心的色彩の濃厚なるに氣付かれる。元來史學史にはその成立過程よりして、史的名著を年代的に擧げてこれを解說する

一、ビブリオグラフィッグなるもの、

二、個人を中心とした、傳記的なるもの、

三、一般的見地により全篇を關聯せしめたる綜合批判的なるものとがある。

三の場合には二樣の傾向を取り、一は歴史哲學史的見方のものとなり、他は純然たる修史の立場よりして史學の發展を跡付けんとするものとになる。然しこの兩者は嚴密に分離されて各〻孤立するものでないことは論をまたない。前者の立場としては G. v. Below, Die deutsche Geschichtschreibung. がその適例であらう。本書は一に Geschichte und Kulturgeschichte. と名付けられる通り、文化史の成立を史的、發展的に見たのであつて、文化史を究極の歴史とする歴史哲學的立場を取るものである。かゝるものは既に史學史の範圍を離れて歴史哲學史の領域に入つたものと云ふべきであらう。後者の場合のみを取るものは未だ現れないが、E. Fueter などは前者の立場より歴史思想的に體系づけると共に、個々の史家の條に特にこれに關する一項を設け、これを通觀することによつてその發展の跡を見る樣にしてある。坂口博士のものはその第一篇歴史哲學成立の項は、しばらくこれを別として、純然たる史家を取扱つたニーブール以下の諸篇は、主として個人を中心とする第二の立場によつて居る。これがその敍述に生彩あらしめ、ドイツ近代の大史家の面目を躍如たらしめる所以であり、又同時に本書が講義そのものであり、完成品としての有機的統一を缺くと云ふ批難の、一部に存する所以でもあらう。然しこれがため『史學者史學者を語る』の興味の存する事も爭れない事實である。殊にランケに於て一層その感が深い。深く彼の個性の內に立ち入り、これを環境、時代に結び付けつつ、生けるランケを描寫の立體化、行文の妙と相まつて文間に躍動せしめ、この點一個

の文藝作品とも云ふべきであらう。又他面彼の主著「羅馬法王史」、「ドイツ史」、「フランス史」、「英國史」、「世界史」を解說せられて、分析と綜合とを施され、各書の內容、成立經過を明にすると同時に、全體を統一的に見てランケの歷史に對する態度が遂に「世界史」の大成を見るに至る心的、技術的過程を的確に敍述せられてゐる。本書に引用らせれてゐるランケの言葉『歷史は藝術であり、同時に學問でもある』を自ら體現せられたものとも云へやう。而して尙本書の傾向を個人中心的とするのは、史家の思想を時代との關聯に於て把握する際、これを前後の時代との關聯に於てせず、たゞ部分的にのみ說いて全體的統一を缺くからである。更に又文獻史料批判法の發展、更に進んでは補助科學を採用してこれを修史の基礎とし、遂に近代史學の面目を樹立するに至る經路も決してこれを無視されたのではない、卽ち前記の『古代史研究の發展につきて』に於て、全篇のプランを窺へば明であらう。しかしこれを全體的の背景とし、この基礎の上に立つて各個の史家を把握するに至らなかつたのは幾分遺憾な點である。この點を强調せられたなら歷史專攻のものの史學史として更にその價値は增したことであらう。

從來吾國に於ては名著解題式のものは二三あらはれたが、本書の如き全般的係列をもつたものはこれが最初であつて、單にその意味からでも大に本書の出現は歡迎せらるべきであらう。歷史とは如何なるものでなければならなかつたか、如何なる方法により取扱れて來たかを知る上に於て何人も先づ一般史學史に通じ、更に各自專攻する所のものの史學史に明であらねばならぬ。この意味に於て價値ある本書の出版せられたことを喜ぶと同時に、遺稿編纂當事者諸氏の努力を深謝する次第である（山下昌孝）。

Japan, A Short Cultural History, by.
G. B. Sansom, London, 1931.

手頃な一册子に日本の文化史を原始時代から最近世まで一括して述べ去ることは、何人も期待して居ることであるがさてその實現は生易しい仕事ではない。我國人の著作の中にもこういふ條件にぴつたり適合するものは極めて稀である。然るに英人であり、大使館にあつて繁務に從事する我サンソム氏は、此難事業を首尾よく完成することが出來た。吾人は氏の攻々として倦まざる努力、その明敏な史才に讚嘆を禁じ得ない。五百三十七頁の著書の中に、上は古代より、奈良、平安、鎌倉、室町、戰國を經て江戶に至る各時代を制度、宗教、藝術、文學、學藝の各方面から精彩に描寫し、然も政治的の推移の略述も忘るることなく主として歷史的展開の導因を經濟的變遷に求め系統ある日本文化史を編述して居る。本書は、たゞに外人に對し便利なる日本文化の研究の手引きを提供するのみならず、我國人にとつても又一讀に價する良著である。先に日本語の歷史的文法なる大著を公刊した著者のことて日本語に對する造詣極めて深く所在古文書などを例證に引いて讀者の印象を深くせんとする手腕は、敬服の至りである。日本に對する同情理解は、全篇を通じて溢れ、殺伐な封建法、殘酷な宗教迫害を說いても之を當時の歐洲の優るとも劣らざる諸例を讀者に想起せしめ、日本人の心性を誤解せしめざらんことに勉め